
命王

さよならニカノル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命王

【Nコード】

N7121Y

【作者名】

さよならニカノル

【あらすじ】

人間の言葉も文字も理解できず、動物としか話せない少年の話。彼は『命王』と呼ばれ人間以外の全ての命から愛される。その彼と、ある不良が出会い友となっていく。

舞台は現代です。

プロローグ

この世界に不思議な命が生まれ落ちた。

彼は人の形をして生まれたが人間の言葉も文字も理解することはなかった。

しかし彼は動物、虫など言葉を持たぬ、人間以外の総ての生命と話し、共に理解し合い、共に生きた。

小さな命、大きな命、
きれいな命、汚い命、
価値ある命、価値なき命、
総てが彼を愛し、彼の下に集った。

その生命達は彼を『命王』と呼んだ。

一匹の蝶が言った。

『命王、あなたはどんなに私達が美しくても私達の自由を奪ったりしない』

一匹のゴキブリが言った。

『命王、あなたは我々がどんなに醜く、汚くても我々を殺したりしない』

彼を慕う、生きとし生ける生命が言った。

『命王、来劫 深。』

私達はあなたの声を聴き、あなたを愛せることを、誇りに思います』

1 環

来劫深と『彼』との出会いは、冬の終わりを告げるような爽やかな陽光の朝だった。

都立首塚高校の校庭の大木の下に、校舎の上の窓からも分かるほどに、たくさんのお虫や動物が集まっていた。

この光景は生徒たちの間ではもう見慣れたものになっていた。

動物達の中心に必ず来劫深がいるのも、もはや周知の事実である。

深はこの高校の一年に在籍していた。

入学当初から深はいつも虫や動物に囲まれ校舎の中を歩いていた。

虫が深の周りを這いずりまわり、猫と鼠が並んで深に向かって好意的に鳴き、鳥達が我先に深の身体に止まろうと突っつき合っていた。

最初は学校中の生徒があり得ないと思うと同時に不思議に思った。

かなりの数の生徒が深と交流しようと試みた。

しかし深は何も言わず、そんな彼らを深い黒い目で見つめるだけだった。

深は少しグレーがかった黒髪に、大きな黒い瞳、小さいが形のいい鼻、薄くてきれいな唇という外人の子供のような顔をしていた。

そういうこともあり、不思議な美少年に最初は学校中が興味を示したが、深の、まるで心を持たないかのような無反応ぶりに、今では誰も深に近づくことさえしなくなった。

深は太陽が昇り始めるとすぐに、学校周りの虫の死骸を集めるのが日課だった。

深を取り巻く動物や虫達も、死んでしまった自分たちの『友達』を深の元に連れてきた。

深に最期の弔いをしてもらうためである。

蟻達は死んだ芋虫の一部をみんなで運んできた。

何日か前、この芋虫が弱っている所に蟻達は食べ物臭いを嗅ぎ取り、近づいた。

芋虫は蟻に、『最期に僕が生きてて楽しかったことを聴いて』と言った。

蟻は早く芋虫に食らいつきたかったが話を聞いた。

芋虫は話した。

きれいな緑の葉っぱを食べておいしかったこと。

飛ぶ蝶を見て、自分もあんな風に飛ぶんだと夢想して嬉しくなったこと。

最期に芋虫は言った。

『蟻さん達、僕を残さず食べてね。たくさん元気な子どもを育ててね。』

僕、蝶にならなくてよかった。

この姿ならいっぱい食べられるよね』

蟻達は食べた。

みんな、短い一生の中でこの芋虫を忘れないと心に誓いながら。

そして命をくれた者を弔いたくて、長い行列を作って何日もかけて命王の所へやってきた。

今、校庭の木の下でそうして集められた、たくさんの小さな命の亡骸が、深の両手のひらに乗せられ静かに埋葬の時を待っていた。

深の手首から死んだ虫達を見つめて、ゴキブリの『ジャック』が言った。

『毎日たくさん死んじゃうな』

ハエの『ユミル』が亡骸の上をホバリング飛行しながら応えた。

『うん。でも仕方ないよ。私達の命は短いんだから。深に出会えただけで幸運だよ』

風が吹き、動物達は一様に動きを停止した。

深が手のひらに乗る亡骸に頬をすり寄せた。

蝶が、蛾が、ムカデがゴキブリが、美醜も価値も関係なくその抱擁を受けた。

命王は幸せそうにずっと目を閉じ、彼らの命の抜け殻の温もりを頬で感じていた。

深は言った。

『しっかり生きてね。今はただゆっくりお休み』

校舎の中では生徒たちがあらかた全員登校し、皆思い思いに授業が始まるのを待っていた。

自由時間のようなもので教室内は朝からテンションの高い生徒達が騒がしくしていた。

窓際で話していた男子生徒と女子生徒が校庭を見やり、深がいるのに気が付いた。

女子生徒が笑って言った。

「あれ、来劫深くんじゃない？またいつもの『虫の埋葬』？」

深の話が出たことで、男子生徒が困惑したように笑った。

「もはやあいつの存在は学園七不思議のひとつだよな。何でいつも虫やら何やらがあいつにくっついて歩いてんの？」

「カワイイ顔してなきゃただの変人よね。

何かあの子、文字も言葉も分かんないらしいよ。噂だけど。

だから喋らないし、授業にも出ないみたい。

だったら何で高校なんて来たのよって感じじゃない？」

その時、バーンと扉が開き、不良っぽい格好をした男子生徒が慌てふためいて教室に入ってきた。

皆が驚いてそちらに注目した。

男子生徒はただならぬ雰囲気で叫んだ。

「ハレルヤが来るぞ！！」

全員が息を呑んだ。

「ハレルヤが登校してくる！！みんな席につけ！

呼吸を乱すな！！

奴が憎くても絶対殺気を出すな！！

いいか、死にたくなければ…」

そのあとの言葉は生徒達の恐怖の叫びと、教室中の生徒が押しのかき消された。合って席に移動する雑音にかき消された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7121y/>

命王

2011年11月21日12時12分発行